



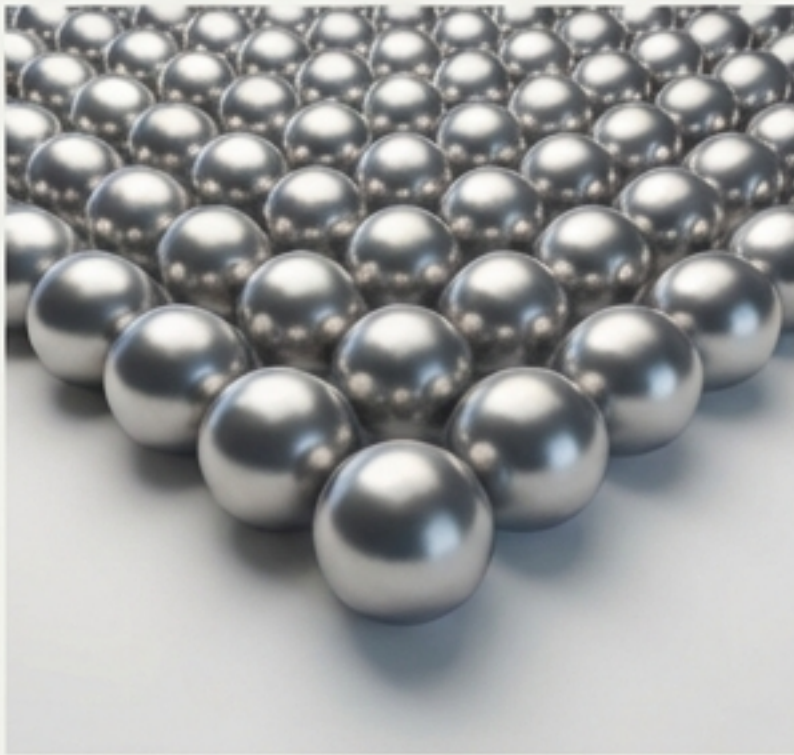
解釈的心理学のアプローチと論理構成

アブダクションと提喩的理解に基づくモデル構成法

Based on the work of Kasai Toshiharu (2005)

「自然の斉一性」という公理の限界

従来の科学的前提 (Quantitative)



心理学の現実 (Qualitative)



パラダイムシフト

【自然の斉一性 (Uniformity of Nature)】

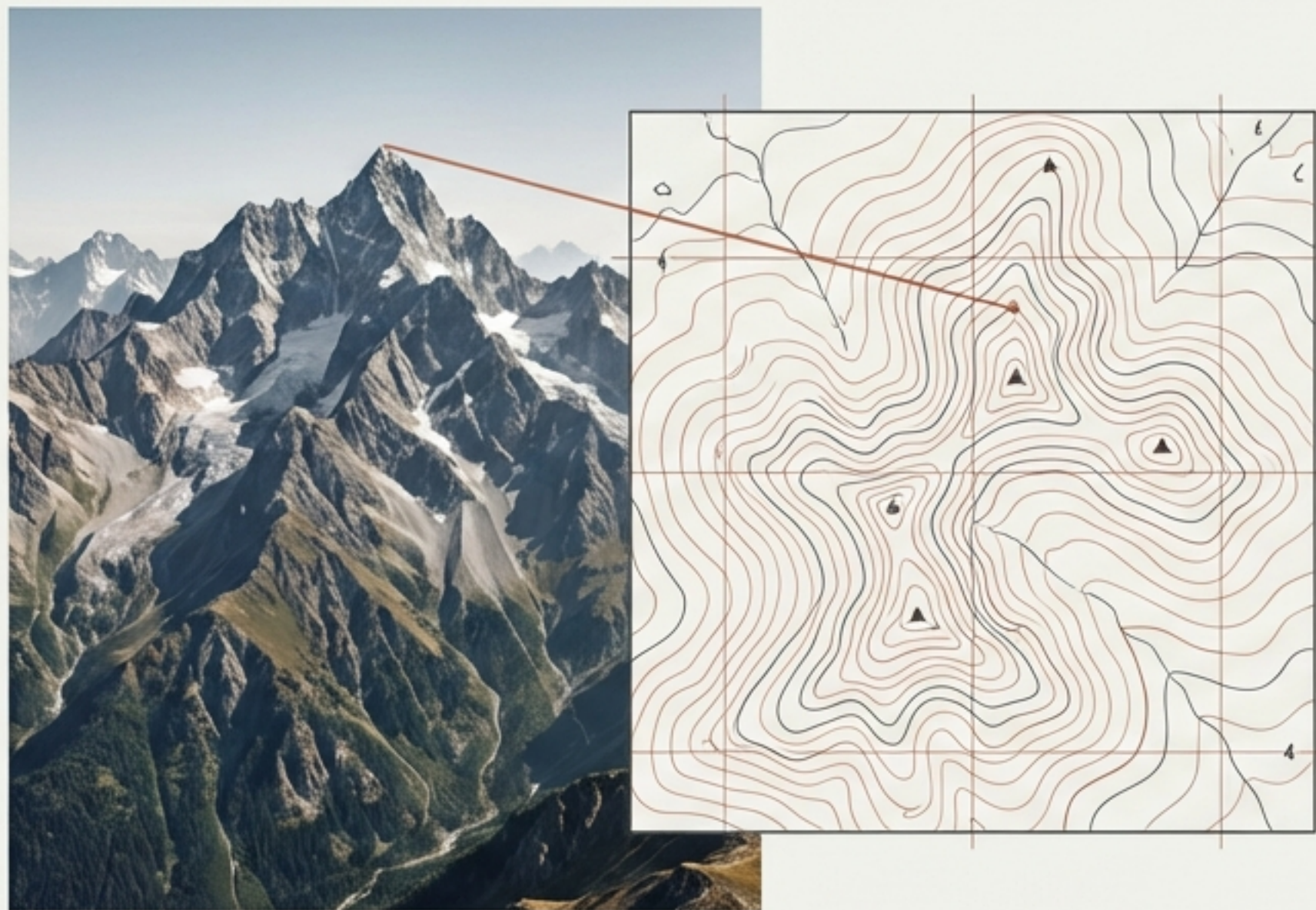
- 前提：いつ、どこでも、条件が同じなら結果は同じ。
- 手法：帰納 (Induction) と演繹 (Deduction)。
- 限界：人間は物質のように均一ではない。

【一回性と個別性 (Individuality)】

- 現実：生育歴、文化、状況が異なる個人の集まり。
- 矛盾：統計的平均値は「誰も代表していない」ことがある。
- 必要性：一回性の人生や個別事例を扱うための新しい論理。

一般意味論：地図は現地ではない

General Semantics: The Map is not the Territory



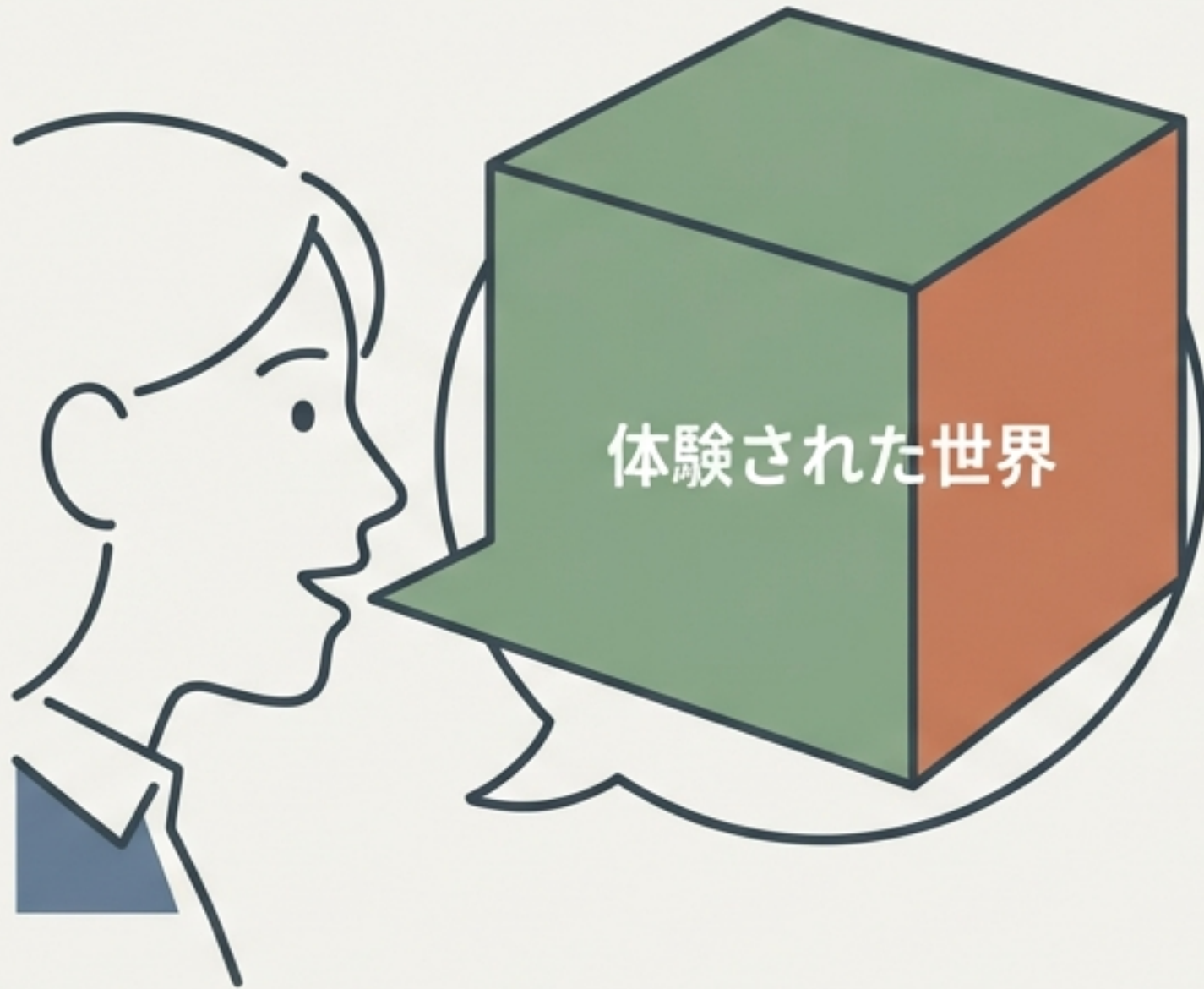
A. コージブスキーの提唱

言葉（地図）は事実（現地）そのものではない。

私たちは「客観的真実」そのものではなく、語り手が現実をどう切り取り、どう言葉にしたかという「抽象化された地図」を研究対象とする。

「言葉による記述は、現実から抽象化された不完全な写しに過ぎない。」

Step 1: 事実性 (Factuality) と措定



【事実性 (Factuality)】

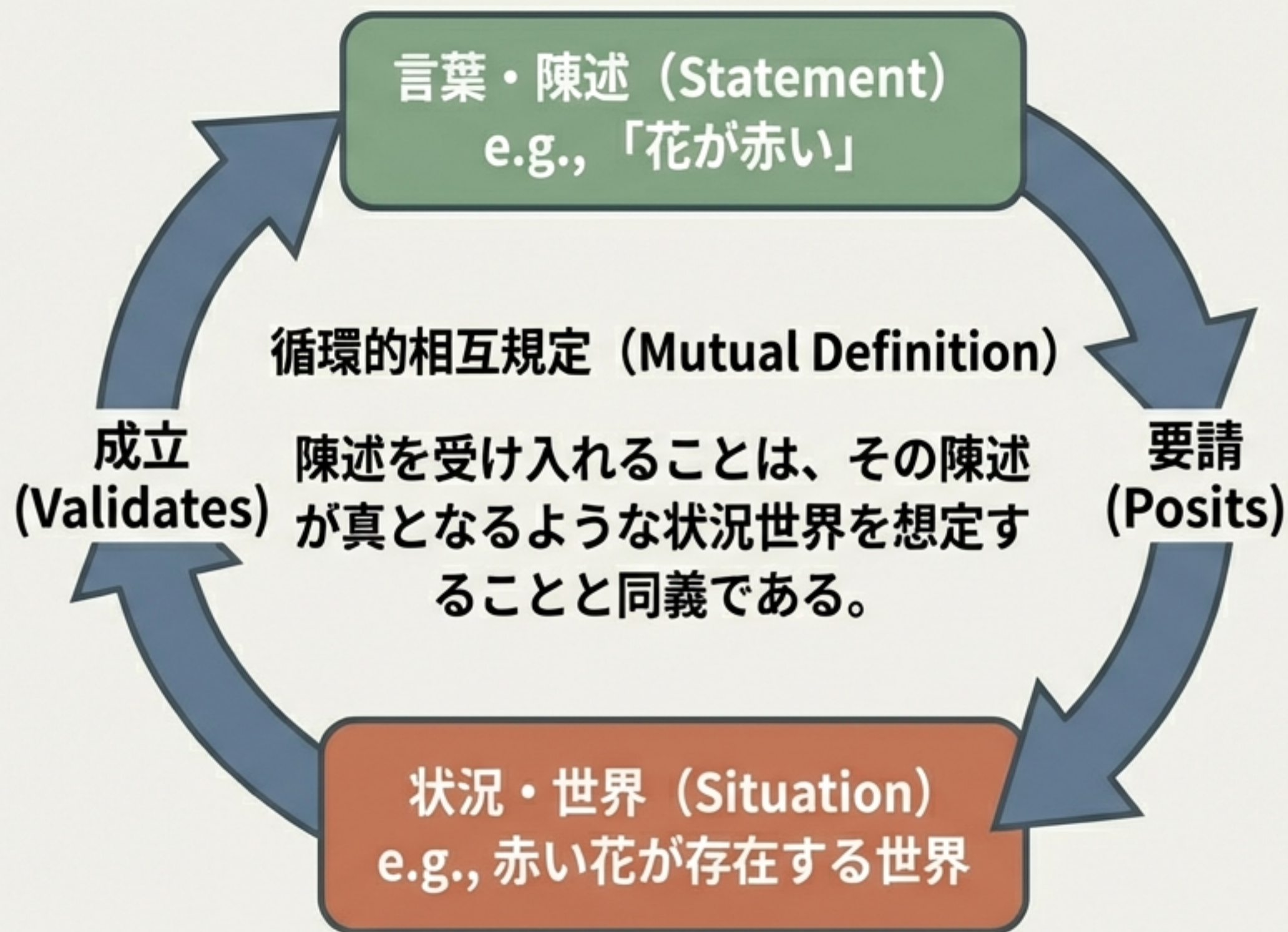
語られた内容の客観的な真偽（本当にあったか？）は一時保留する。

重要なのは、語り手にとって「そのように感じられ、語られた」という事実そのものである。

【措定 (Setzung / Positing)】

- ・ 証明なしに命題を主張すること（定立）。
- ・ クライアントが「つらい」と語れば、そこに「つらいという体験世界」が存在するとみなす。
- ・ A.シュッツの現象学的視点：体験された世界こそが、本人にとってのリアリティである。

陳述と状況のトートロジー的解釈



【面談における二者性】
語り手の「主題化された世界」に対し、聞き手もまた「了解」という事実性を持ち込む。この相互循環が理解を形成する。

Step 2: アブダクション（仮説発想）

The Logic of Discovery: Beyond Induction and Deduction



1. 驚くべき事実 A がある。



2. もし仮説 B が真であれば、
A は当然のこととして理解
できる。

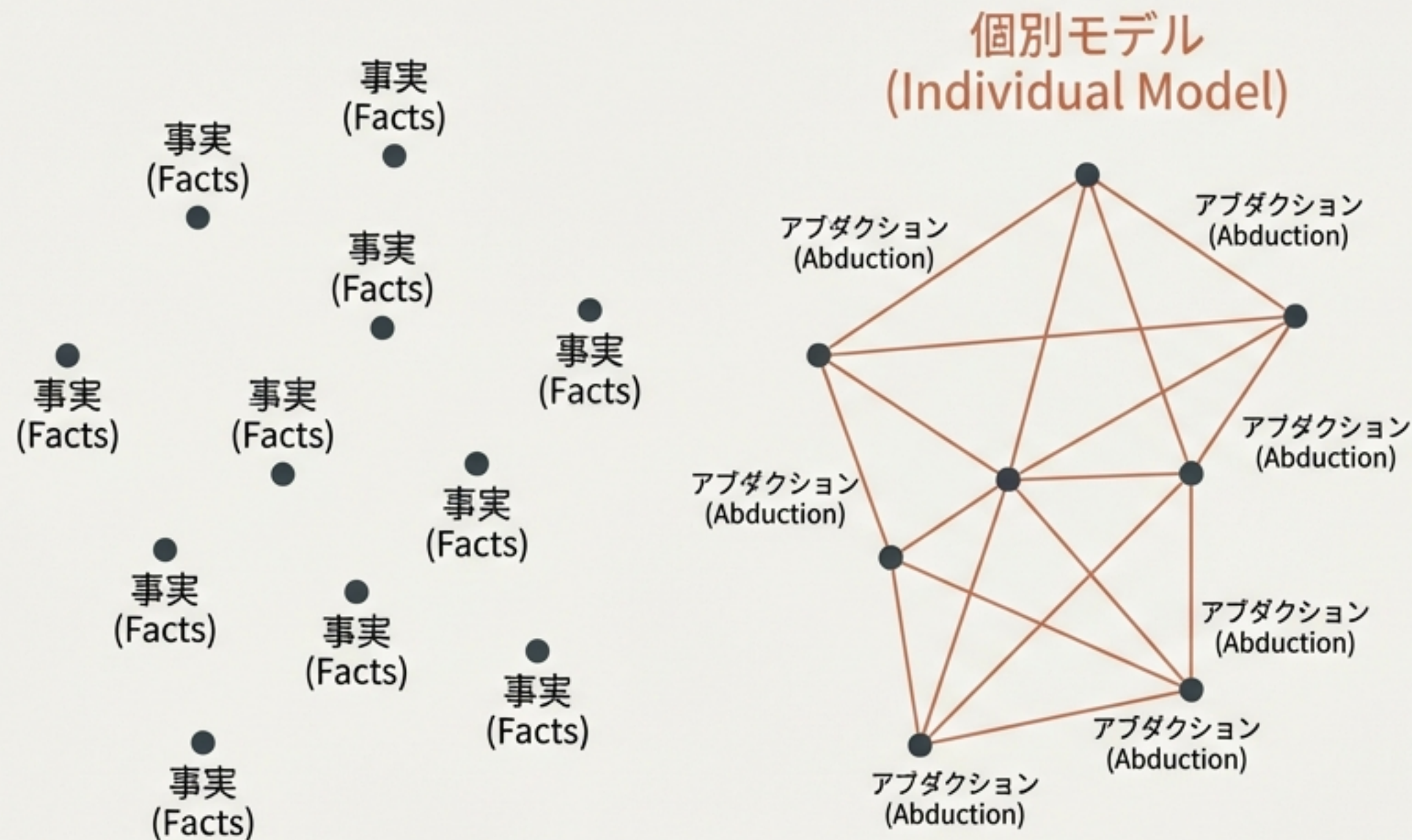


3. よって、B が真であると考
える理由がある。

C.S.パースの論理（Retroduction）

- 演繹（法則→結果）でも帰納（データ収集→法則）でもない、「発見」のための論理。
- 臨床心理において、クライアントの不可解な言動（事実A）に対し、それが整合的になるような背景（仮説B）を見出すプロセス。

内的整合性に基づく「個別モデル」の構築



【モデルの生成】

- 断片的な事実（語り）を、アブダクションを用いて論理的に接続する。
- 「なぜそう感じ、そう行動したか」が一貫して説明できる「仮説構造体」を作り上げる。

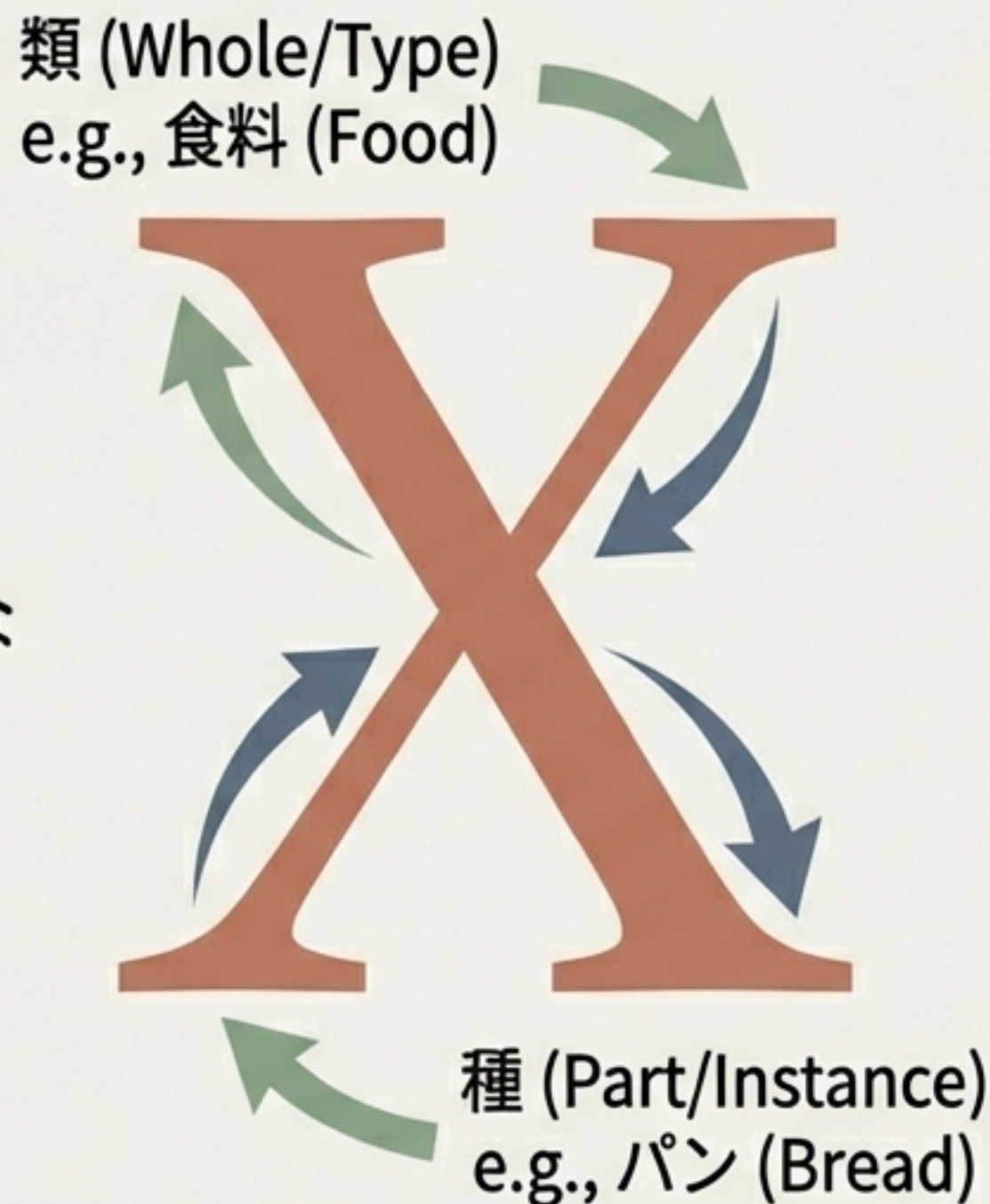
【検証の基準】

- 統計的な「数」ではなく、論理的な「内的整合性（Internal Consistency）」の強度がモデルの正しさを支える。
- （例：FBIのプロファイリングのように、断片から全体像を構成する）

Step 3: 提喻 (Synecdoche) による一般化

【質的研究の難問】

たった一人の「個別モデル」を、どうやって科学的な「一般的知見」に高めるのか？



【提喻 (Synecdoche) の定義】

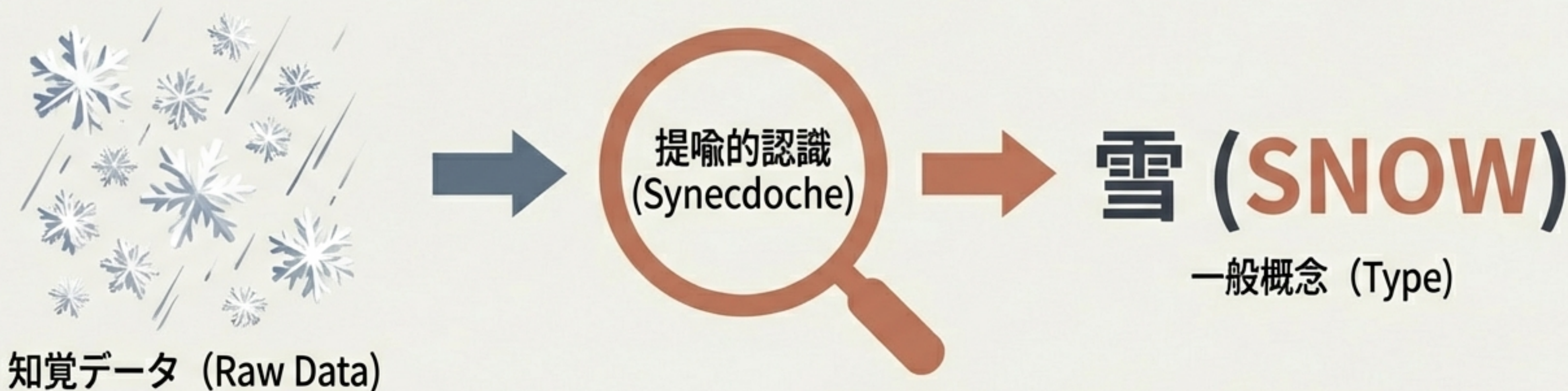
- 部分で全体を表す、あるいは全体で部分を表す比喩。
- 例：「パン（個）」と言うことで「食料全体（類）」を指す（『人はパンのみにて生きるにあらず』）。
- 例：「花（類）」と言うことで「桜（個）」を指す（『花見』）。

【論理の転換】

- 「数」による一般化（帰納）から、「代表性」による一般化（提喻）へ。

提喩は「修辞」ではなく「認識」である

Synecdoche as Cognitive Mechanism



【比喩的認識 (Figurative Recognition)】

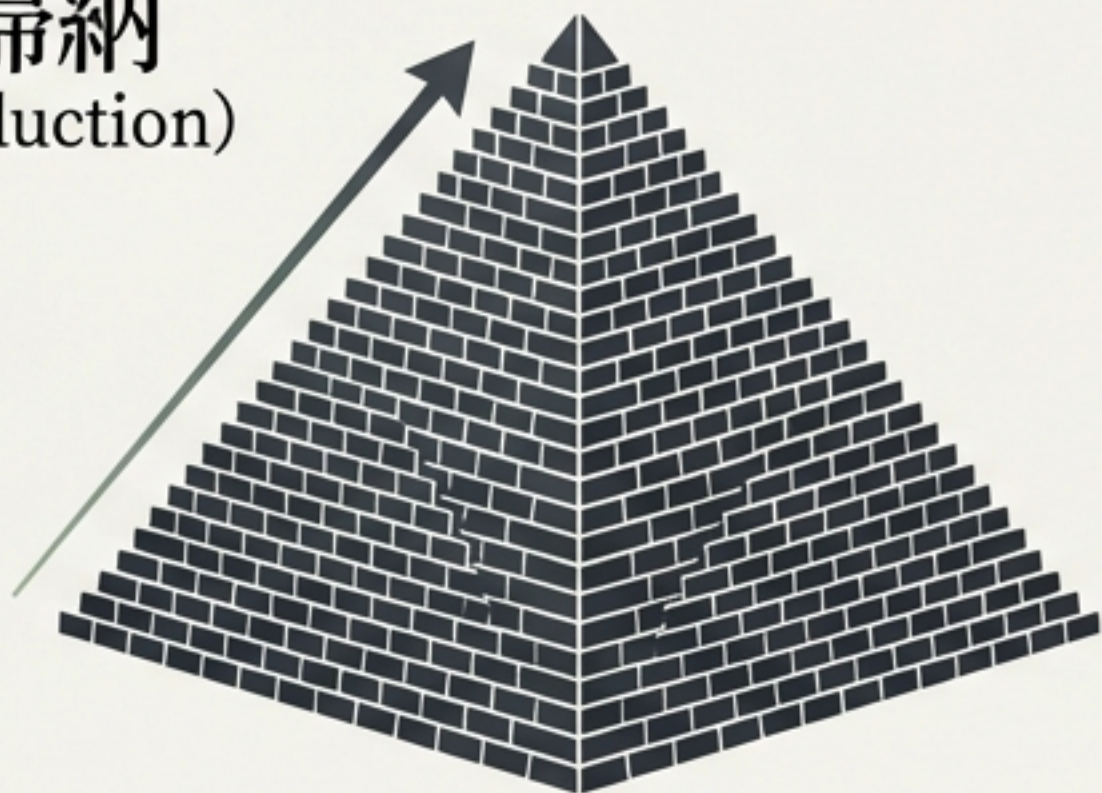
- 佐藤信夫（レトリック研究）の指摘：人間の認識作用そのものが提喩的である。
- 我々は生のデータを見るのではなく、常に「型（タイプ）」として世界を見ている。

【重提喩 (Double Synecdoche)】

- 「個を見る」ことは、同時に「類（一般）を見る」ことである。
- 特定の「犬」を見る時、我々は自動的に「犬という種」の代表として認識している。
- 結論：人間は常に、個を通じて普遍を見ている。

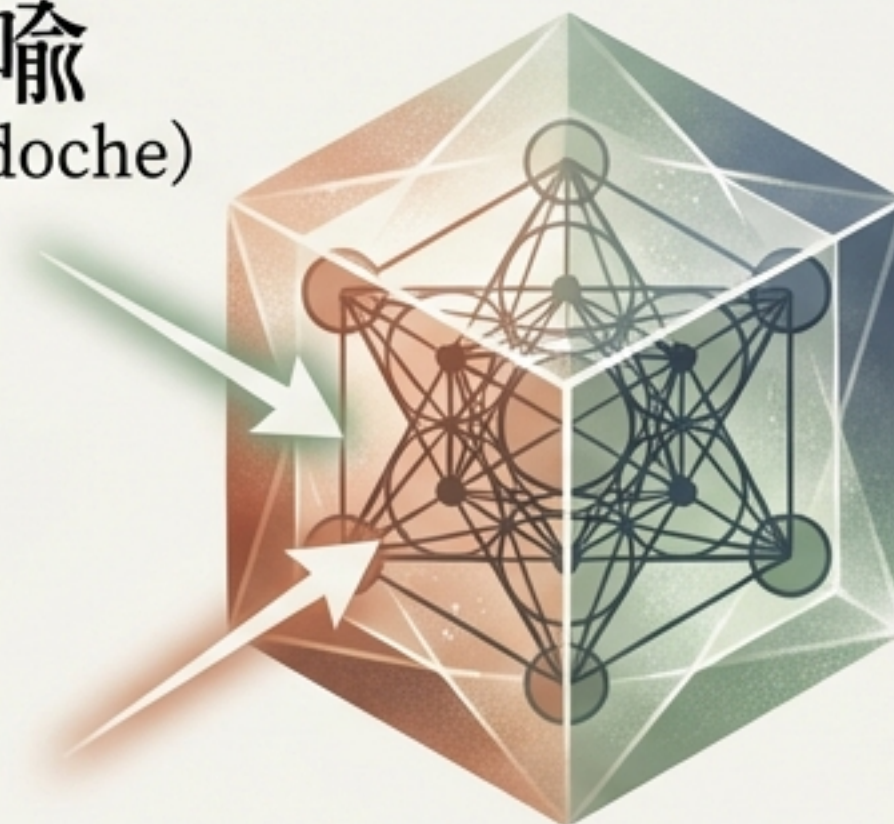
「提喩的了解」による科学的妥当性

帰納
(Induction)



多くの事例（量）を集めて共通項を探す。

提喩
(Synecdoche)

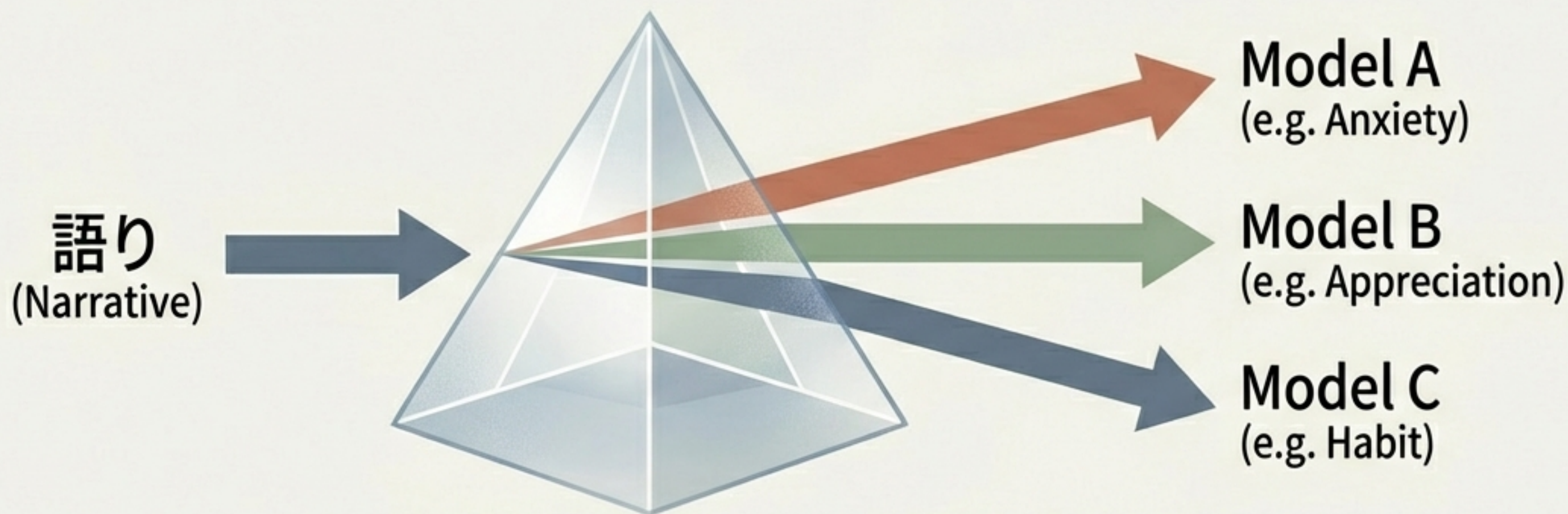


一つの事例（質）を深く掘り下げ、
その背後にある普遍的な「型」を見出す。

【臨床事例の科学性】

- 個別の事例（Aさんの語り）は、深く理解されることで「人間という類」のプロトタイプとなる。
- 一人のモデルの中に、人類共通の心理的メカニズムが提喩的に内包されている。

背反二値モデルから「多重併存モデル」へ



【二値論理の限界】

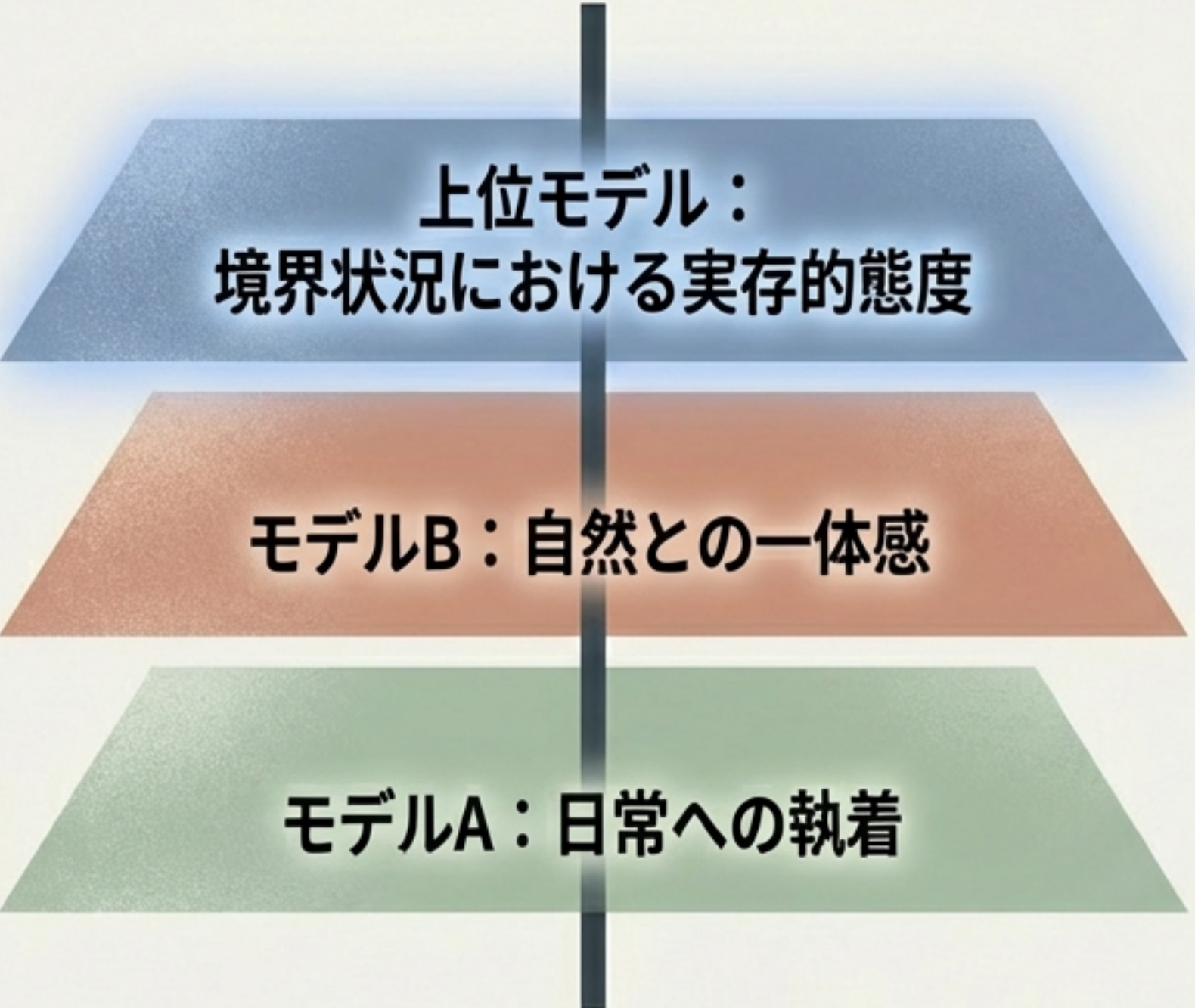
「Aである」か「Aでない」か（真偽）という論理は、複雑な心理現象には適さない。

【多重併存 (Multiple Models)】

相反するモデルが同時に成立することを認める。「死に際して天候を語る」理由は一つではない。異なる心理的現実が、音楽の和音 (Polyphony) のように共存している。

「上位モデル」の発見と発想

Discovery of the Higher-Order Model



上位モデル：
境界状況における実存的態度

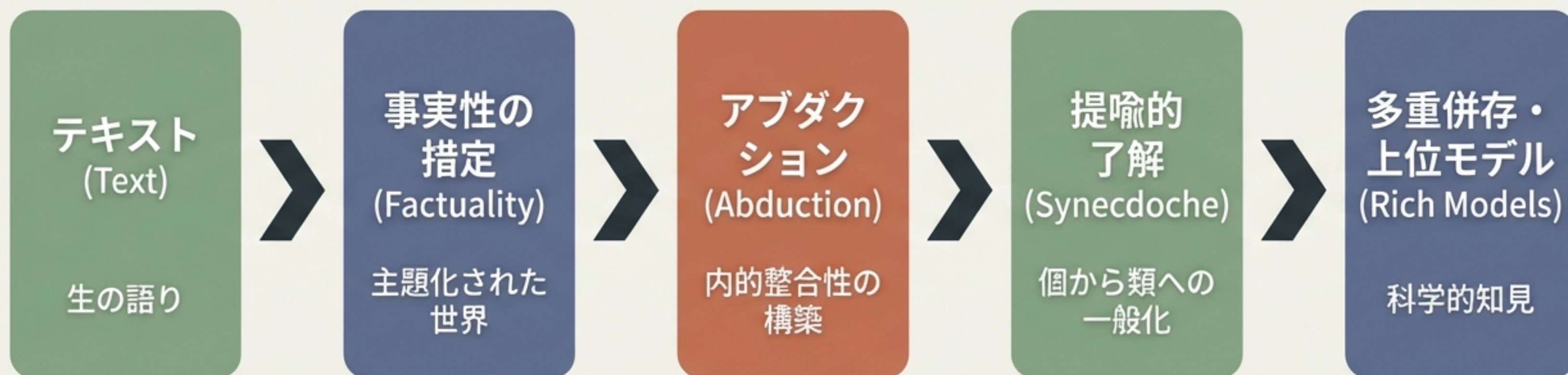
モデルB：自然との一体感

モデルA：日常への執着

【上位モデル（Higher-Order Model）】
併存する複数のモデルを俯瞰し、それらを包
括するより深い「意味」を見出す（メタ・モ
デル）。

【事例：死に際してなぜ天候を語るのか？】
天候そのものが重要なのではなく、「死」
天候そのものが重要なのではなく、「死の切
実さの中で、しみじみとした語りの態度が
生じること」が本質である。提喻的類化によ
って、個別の現象から「人間存在の深み」に
関わる普遍的なテーマへ到達する。

解釈的アプローチの論理フロー



統計的処理を経ずとも、論理的推論の積み重ねによって「モデルの妥当性」は担保される。

結論：「モデルの豊かさ」を目指して



【還元主義からの脱却】
人間を単純な数値や法則に還元するのではなく、その複雑さと奥行きを保持したまま理解する。

【解釈的心理学の要件】

1. 事実性探求の徹底
2. アブダクションの論理的深さ
3. 提喩による普遍的類化

「一人の語りには、すべての人の真実が提喩的に含まれている。」